

3万5千年をめぐる種子島と遺跡 立切遺跡・横峯遺跡国史跡指定記念シンポジウム開催！



令和4年11月10日の官報公告にて、国史跡となった立切遺跡（中種子町坂井）と横峯遺跡（南種子町島間）の指定を記念して、12月11日に、南種子町と共同で国史跡指定記念シンポジウムが種子島こりーなで開催されました。

シンポジウムの第一部では、岡山大学名誉教授の稲田孝司さん、東京大学大学院准教授の森先一貴さんからみた遺跡の重要性や可能性などについての講演がありました。

第二部では、株式会社宙の駅代表取締役の本田静さんが、地域における遺跡の活用について講演を行いました。その後、2人の講師と中種子町と南種子町の町長を交え、「遺跡の活用と課題」をテーマに、パネルディスカッションがあり、貴重な意見交換が行われました。

このシンポジウムの様子は、町ホームページからご覧いただけます。

また、同日に開催された立切遺跡・横峯遺跡フォトコンテストでは、「立切賞」「種子島影生（F）の会賞」のダブル受賞に輝いた、黒木結愛さん（本村）が表彰されました。

なお、立切遺跡の応募作品は、2月26日まで歴史民俗資料館に展示していますので、ぜひご覧ください。それと合わせまして、令和5年1月5日から2月26日まで、歴史民俗資料館で、特別企画展を開催します。町民の皆様のご来場をお待ちしています。



地域おこし協力隊通信 (No. 71) おもしろい観光地の正体

前回の協力隊通信では「地域活性化には、やってみることに挑戦する文化が重要」ということを書きました。農業の機械化や作物の品種改良など、先人が数々の挑戦と失敗を繰り返した結果が今の私たちの暮らしを豊かにしていることは間違いのないと思います。

その挑戦と失敗が重要なのは農業だけでなく、地域活性化についても同じだということを中種子町に来てから学びました。祭りの準備や地域の行事、その過程でしばしば成長痛を伴いながら、地域は成長していくのだと感じています。

さて今回は、中種子町地域おこし協力隊として種子島の観光に携わってきたことで知った、「おもしろい観光地の正体」について書きたいと思います。

岩手県出身の私が種子島へ引越してきてからの日々は、それはもう驚きの連続でした。旅立つ人を見送る人であふれる港。日差しが鋭いわりに日陰に入れば意外と過ごしやすい夏。東北と違って紅葉せず蝉が鳴いている秋。台風かと勘違いしてしまうような冬の季節風。季節の移りも本州と違って曖昧で、ひとびとは野に咲く花や野菜の収穫時期で季節の変化を感じ取っていて、その自然と共生する姿にも驚いてばかりでした。

こんな驚きの生活は、私の日々の暮らしを「観光」にしています。暮らしているだけで、旅行中のようなワクワク感が絶えず好奇

心をくすぐるのです。わたしは、このワクワク感こそがおもしろい観光の正体なのだと感じました。言い換えれば、「どれだけ非日常にあふれているか」こそが、おもしろい観光地の正体だと思うのです。

鹿児島県で開催される北海道物産館の売上は全国でもかなり上位にあるそうです。私たち鹿児島県に住んでいる人にとって、雪に覆われた大地や、冷帯の気候で採れる食材は非日常そのものです。鮭が川を登ったり、熊の毛皮が売っていたり。きっとそんな場面を北海道で見れたなら、それだけで非常に楽しい時間になるでしょう。これはまさしく、私たちにとっての非日常があふれているからだと思うのです。

そして中種子町は、島に住んだことのない人にとっては非日常であふれています。透명한海、北限のマンングローブ林、ロケットの打ち上げ、相撲大会。こうした町民にとって当たり前でも、なじみのない人にとっては非日常と言える景色が沢山あります。これらを抱えきれないほど持っている中種子町は、おもしろい観光地に違いないと、わたしは確信しているのです。

湯目由華（ゆのめゆか）
中種子町地域おこし協力隊員。
岩手県出身。「やってみよう！」と一緒に実現する伴走者。地域デザイン。中小企業庁の専門家派遣事業「中小企業1-19」専門家。